



ジョン・ラーベ。彼を主人公に南京大虐殺をテーマにした独・中合作映画制作中

# 「ラーベの日記」が明かした

# ヒトラーと「南京大虐殺」

古荘光一  
フリージャーナリスト

## 見逃されてきた証拠

いわゆる「南京大虐殺」は、蒋介石政権が外国人を使ってでっち上げたものであった。ところが、後に中国共産党がこれを、ほしのままに脚色して架空の地獄絵を描いてみせた。それを受けて、南京陥落七十周年の今年、アメリカで「南京大事件」をテーマにした映画が公開された。また、議会下院においては、支那

系住民から多額の政治献金を受けているマイク・ホンダ議員らが提出した「従軍」慰安婦問題で日本の謝罪を求める決議案を提出。あっさり通過するなどことを一段と重大化させる動きが続いている。

これは座視し得ない展開である。この機会に、「南京事件」の作り替えに中国共産党が関与していた証拠を提示し、併せてその詐術の手の内を明らかにしたい。

よく知られている通り、十年前、在米華僑の娘、アイリス・チャン

（故人）が『ザ・レイプ・オブ・南京』と題する本を書きベストセラーになった。これには邦訳がなく（数限りない誤りを指摘され、作者がその削除、訂正を拒んだため、出版社側が出版を中止した）、このため日本では、日本軍の「蛮行」を強調しているだけの内容だと見られてきたようである。

しかし、これは誤った見方である。注目すべき点は、第二次世界大戦における欧米各国の主な戦争犯罪を軒並み免責し、あまつさえドイツ人を礼賛している事実である。

## 欧米の戦争犯罪を許す

「人間の人間に対する残虐行為の歴

史は長くかつ悲しい物語である。しかし、そんな恐怖の物語のうちに冷酷さの度合いというものがあるとしたら、強烈さと規模において第二次大戦中のレイプ・オブ・南京に匹敵するものはない」（三ページ、拙訳による。以下同様）

「南京——支那の一都市——での死は、ヨーロッパにおける全戦争での非戦闘員の死者の数を上まわる。（英国六万一千人、フランス十万人八千人、ベルギー十万人一千人、オランダ二十四万二千人）」（五ページ）

「今世紀は大量殺人の手段が発達して、ヒトラーが約六百万人のユダヤ人を殺し、スターリンが四百万人以上のロシア人を殺したの事実だが、これらの殺人は数年かけて実行された。これに対し、レイプ・オ

「南京で死んだ人の数は英国によるドresden空爆の死者より多い。（中略）南京での死者を控えめに二十五万人と見ても、また最大三十五万人と見ても、それはアメリカによる東京空襲での死者（推定八万十三万人）や広島と長崎の原爆による死者を合わせた数（それぞれ十四万人と七万人）より大きい」（六ページ）

# ●ヒトラーと南京大虐殺

	支那語版	ドイツ語版	日本語版	英語版
出版年月	1997年8月	1997年10月	1997年10月	1998年
訳者	7人		1人	1人
写真	80枚	30枚	38枚	60枚

「日記」がそれである。ヒトラーに宛てた「秘密報告書」は、当時、漢口に避難していたドイツ大使オスカー・トラウトマンの手を経由してドイツに渡った。「日記」はラーベ自身が持ち帰った。チャンの「レイブ・オブ・南京」は、ラーベの肉親が保管していた「日記」をチャンが発見したという作り話から始まる。チャンは一九九五年に南京へ行き、生存者から聞き取り調査をしたが、この時すでにラーベのことを知っていた。ところが、チャンはその後、つまり、一九九六年に日記の所在確認に乗り出し、知人

一段階は、当初、死者二万人としていた時期から、戦後、東京で開かれた極東軍事裁判までである。裁判での蒋介石政権の主張は三十万人だったが、これは認められなかった。次の段階で、日本人が登場した。口火を切ったのは朝日新聞の記事、本多勝一記者の「中国の旅」であるが、ほぼ同時に早稲田大学教授だった洞富雄が粗雑な本を書いて、記事を弁護した。やがて洞は仲間と「南京事件調査研究会」を組織し、支那側と連絡をとりつつ「事件」の範囲を拡大し、証拠隠蔽さえする。第三の段階では中国共産党の手先である在米工作員が活躍を開始する。十年以上の準備期間を経て、一九九七、九八年に三冊の本を出版した。

一冊がチャンの本、もう一冊がいわゆる「ラーベの日記」、それに尹集鈞・史詠共著の写真集「レイブ・オブ・南京 否定できない歴史」である。いま諸外国のマスコミがいう「レイブ・オブ・南京」はこれらに基づいている。この三冊は相互に関連するが、土台となるのは「ラーベの日記」である。ラーベはシーメンス社の社員でナチ黨員、当時、「南京国際安全区委員会」の委員長を務めていた。委員会は、難民の救済を看板にしていたが、それらしい仕事はほとんどせず、全員が嘘の作文にいそしんだ。ラーベも南京陥落の数カ月前から、翌一九三八年二月初旬まで連日タイプを打ち、二種類の文書をこね上げる。ヒトラーに宛てた「秘密報告書」とも出来がっていた。

## 中共の差し金で

「日記」がそれである。ヒトラーに宛てた「秘密報告書」は、当時、漢口に避難していたドイツ大使オスカー・トラウトマンの手を経由してドイツに渡った。「日記」はラーベ自身が持ち帰った。チャンの「レイブ・オブ・南京」は、ラーベの肉親が保管していた「日記」をチャンが発見したという作り話から始まる。チャンは一九九五年に南京へ行き、生存者から聞き取り調査をしたが、この時すでにラーベのことを知っていた。ところが、チャンはその後、つまり、一九九六年に日記の所在確認に乗り出し、知人

一段階は、当初、死者二万人としていた時期から、戦後、東京で開かれた極東軍事裁判までである。裁判での蒋介石政権の主張は三十万人だったが、これは認められなかった。次の段階で、日本人が登場した。口火を切ったのは朝日新聞の記事、本多勝一記者の「中国の旅」であるが、ほぼ同時に早稲田大学教授だった洞富雄が粗雑な本を書いて、記事を弁護した。やがて洞は仲間と「南京事件調査研究会」を組織し、支那側と連絡をとりつつ「事件」の範囲を拡大し、証拠隠蔽さえする。第三の段階では中国共産党の手先である在米工作員が活躍を開始する。十年以上の準備期間を経て、一九九七、九八年に三冊の本を出版した。

一冊がチャンの本、もう一冊がいわゆる「ラーベの日記」、それに尹集鈞・史詠共著の写真集「レイブ・オブ・南京 否定できない歴史」である。いま諸外国のマスコミがいう「レイブ・オブ・南京」はこれらに基づいている。この三冊は相互に関連するが、土台となるのは「ラーベの日記」である。ラーベはシーメンス社の社員でナチ黨員、当時、「南京国際安全区委員会」の委員長を務めていた。委員会は、難民の救済を看板にしていたが、それらしい仕事はほとんどせず、全員が嘘の作文にいそしんだ。ラーベも南京陥落の数カ月前から、翌一九三八年二月初旬まで連日タイプを打ち、二種類の文書をこね上げる。ヒトラーに宛てた「秘密報告書」とも出来がっていた。

「日記」がそれである。ヒトラーに宛てた「秘密報告書」は、当時、漢口に避難していたドイツ大使オスカー・トラウトマンの手を経由してドイツに渡った。「日記」はラーベ自身が持ち帰った。チャンの「レイブ・オブ・南京」は、ラーベの肉親が保管していた「日記」をチャンが発見したという作り話から始まる。チャンは一九九五年に南京へ行き、生存者から聞き取り調査をしたが、この時すでにラーベのことを知っていた。ところが、チャンはその後、つまり、一九九六年に日記の所在確認に乗り出し、知人

一段階は、当初、死者二万人としていた時期から、戦後、東京で開かれた極東軍事裁判までである。裁判での蒋介石政権の主張は三十万人だったが、これは認められなかった。次の段階で、日本人が登場した。口火を切ったのは朝日新聞の記事、本多勝一記者の「中国の旅」であるが、ほぼ同時に早稲田大学教授だった洞富雄が粗雑な本を書いて、記事を弁護した。やがて洞は仲間と「南京事件調査研究会」を組織し、支那側と連絡をとりつつ「事件」の範囲を拡大し、証拠隠蔽さえする。第三の段階では中国共産党の手先である在米工作員が活躍を開始する。十年以上の準備期間を経て、一九九七、九八年に三冊の本を出版した。

一冊がチャンの本、もう一冊がいわゆる「ラーベの日記」、それに尹集鈞・史詠共著の写真集「レイブ・オブ・南京 否定できない歴史」である。いま諸外国のマスコミがいう「レイブ・オブ・南京」はこれらに基づいている。この三冊は相互に関連するが、土台となるのは「ラーベの日記」である。ラーベはシーメンス社の社員でナチ黨員、当時、「南京国際安全区委員会」の委員長を務めていた。委員会は、難民の救済を看板にしていたが、それらしい仕事はほとんどせず、全員が嘘の作文にいそしんだ。ラーベも南京陥落の数カ月前から、翌一九三八年二月初旬まで連日タイプを打ち、二種類の文書をこね上げる。ヒトラーに宛てた「秘密報告書」とも出来がっていた。

「日記」がそれである。ヒトラーに宛てた「秘密報告書」は、当時、漢口に避難していたドイツ大使オスカー・トラウトマンの手を経由してドイツに渡った。「日記」はラーベ自身が持ち帰った。チャンの「レイブ・オブ・南京」は、ラーベの肉親が保管していた「日記」をチャンが発見したという作り話から始まる。チャンは一九九五年に南京へ行き、生存者から聞き取り調査をしたが、この時すでにラーベのことを知っていた。ところが、チャンはその後、つまり、一九九六年に日記の所在確認に乗り出し、知人

一段階は、当初、死者二万人としていた時期から、戦後、東京で開かれた極東軍事裁判までである。裁判での蒋介石政権の主張は三十万人だったが、これは認められなかった。次の段階で、日本人が登場した。口火を切ったのは朝日新聞の記事、本多勝一記者の「中国の旅」であるが、ほぼ同時に早稲田大学教授だった洞富雄が粗雑な本を書いて、記事を弁護した。やがて洞は仲間と「南京事件調査研究会」を組織し、支那側と連絡をとりつつ「事件」の範囲を拡大し、証拠隠蔽さえする。第三の段階では中国共産党の手先である在米工作員が活躍を開始する。十年以上の準備期間を経て、一九九七、九八年に三冊の本を出版した。

一冊がチャンの本、もう一冊がいわゆる「ラーベの日記」、それに尹集鈞・史詠共著の写真集「レイブ・オブ・南京 否定できない歴史」である。いま諸外国のマスコミがいう「レイブ・オブ・南京」はこれらに基づいている。この三冊は相互に関連するが、土台となるのは「ラーベの日記」である。ラーベはシーメンス社の社員でナチ黨員、当時、「南京国際安全区委員会」の委員長を務めていた。委員会は、難民の救済を看板にしていたが、それらしい仕事はほとんどせず、全員が嘘の作文にいそしんだ。ラーベも南京陥落の数カ月前から、翌一九三八年二月初旬まで連日タイプを打ち、二種類の文書をこね上げる。ヒトラーに宛てた「秘密報告書」とも出来がっていた。

## 死の商人、ラーベ

このトリックの詳細に入る前に、いわゆる「南京大虐殺」の変遷を跡付けておく。この虚構はこれまで大まかに、三つの段階を経ている。第

一冊がチャンの本、もう一冊がいわゆる「ラーベの日記」、それに尹集鈞・史詠共著の写真集「レイブ・オブ・南京 否定できない歴史」である。いま諸外国のマスコミがいう「レイブ・オブ・南京」はこれらに基づいている。この三冊は相互に関連するが、土台となるのは「ラーベの日記」である。ラーベはシーメンス社の社員でナチ黨員、当時、「南京国際安全区委員会」の委員長を務めていた。委員会は、難民の救済を看板にしていたが、それらしい仕事はほとんどせず、全員が嘘の作文にいそしんだ。ラーベも南京陥落の数カ月前から、翌一九三八年二月初旬まで連日タイプを打ち、二種類の文書をこね上げる。ヒトラーに宛てた「秘密報告書」とも出来がっていた。



ほぼ同時期に出版された「南京の真実」(左)と「レイプ・オブ・南京」(右)

事館に勤務し、後に東京のドイツ大使館に転勤になった。その後、中共治下の支那でドイツ大使を勤め、引退後、文筆生活に入った。

この自伝を読んだラインハルトが一九九五年にヴィッケルトに連絡をとったという。これが「ラーベの日記」が世に出るきっかけであり、チャンの発見ではない。

事実、チャンはニューヨークでの「発見」記者会見より先に、人民日報の記者がラインハルトを訪れたと書いている(一九五ページ)。

また「ラーベの日記」の出版を計画実行したのは、チャンではない。支那の江蘇省人民出版社と江蘇省教育出版社が、中国共産党江蘇省委員会、江蘇省人民政府の「同志的関心」の下で交渉に当たり、ドイツ語版の出版に踏み切らせる一方、支那語版

の翻訳権を獲得した。

中共の差し金であることは、各国版の出版時期の違いを見れば一目瞭然である。支那語版が最初に出版され、ドイツ語版はその後に出版された。通常の翻訳本と逆の順序だ。

その上、二つの版の間には内容にかなりの違いがある。まず、支那語版はドイツ語版を正確に訳したものではない。支那語版では南京と無関係の記事が削除されている。

また、使用した写真の枚数に大差があり、支那語版には、ドイツ語版にない写真が、ドイツ語版にない説明とともに盛り込まれている。

これらの写真は、国際安全区委員会の委員であったアメリカ人宣教師、ジョン・マギーと、やはり委員で、ドイツ人のクリスチャン・クレイガ

ーが撮影したとあり、写真説明はマギーによると断つてある。

### 写真は人民出版社提供

私が調べたところによれば、世間に流布されている話と違って、マギーは映画を撮影していない。日本軍の残虐行為を示す写真とされているものはすべて贗物であり、この点は東中野修道、小林進、福永慎次郎共著『南京事件「証拠写真」を検証する』において確認されている。

ドイツ語版との間にこれだけの違いがあると、支那語版とそれ以外のドイツ語版、英語版、日本語版とは無関係であると強弁することができなくなるかも知れない。

しかし、そうはいかない。まず各版に共通してヴィッケルトの解説がついている。

また、英語版に載っている写真は、

江蘇人民出版社から提供を受けたと明記してある。さらに、日本語版にも同人民出版社提供の写真が使っており、しかも、翻訳作業中に訳者は支那語版を贈られたとある。これらの事実こそ、話の作り替えに中共が関与した証拠だ。

要約すると、中共関係機関が「ラーベの日記」を準備し、それを受けてチャンが「レイプ・オブ・南京」を書いた。その事実をこまかすため、チャンは「ラーベの日記」を発見したと主張したわけである。

### チャン、やり込められる

「レイプ・オブ・南京」に関連した前記三冊は、一九九七年を期して世に出た。これは南京陥落から六十年、人間にたとえれば還暦に当たる年である。中国共産党は、「ラーベの日記」を利用して「南京事件」を作り変えるため、この機をねらっていた。

「日記」を重視するもっともらしい説明が、チャンの『レイプ・オブ・南京』の百九十六ページに出ている。次の三点である。

(一) レイプ・オブ・南京が実際に

あったことを示す証拠。

(二) ナチス党员(ラーベ)の視点からの叙述である点が重要。ナチス党员には事件をでっち上げる動機がない。

(三) ラーベの文書にはアメリカ人が書いた日記類のドイツ語訳が含まれ、アメリカ人の報告を権威付けた。オリジナルと文言が一致する。

(三) は確認していないが、(一) が口からでまかせであることは後日、チャン自身が白状する破目になる。

経緯はこうだ。

アメリカで「ラーベの日記」の英語版が出た後、一九九八年十二月十三日付けのニューヨーク・タイムズにシャリル・ウーダン記者による書評が載った。ウーダンが夫のニコラス・クリストフと共に、中国政府が多数のデモ隊員を戦車でひき殺した

「天安門事件」の報道でピューリッツァー賞に輝いた記者である。書評の主要部分を引用する。

「日記で最も興味深いことの1つは、日本人による拷問、強姦、大量殺人について語るラーベが、支那人自身が普通に描いてみせる残虐行為を見ていることがつらいことだ。生き埋め、大量の内臓取り出し、凍死させる行為、生きたまま犬に食われながらの死といった話はない」

「当然のことながら、日本兵は外国人目撃者の居るところでの拷問は避けたであろうが、ラーベは支那人の助手から（日本人の）蛮行の報告を受けていた。（もしラーベがそんな話を書き留めていたなら）ラーベの知人でその孫から日記を受け取った編集者のエルヴィン・ヴィツケルトは、それを省くことはなかっただろう。」

陥落以前に逃げ出したとする。また、安全区（に入った難民）は最終的に二十五万人に達し、多くの人がそこで殺されたものの、ほとんどは生き残ったと書いている。ラーベが消息に触れていない人口は十五万人ということになる」

「死体を埋葬した善隣団体の報告にある数字に依拠したラーベは、五万人から六万人が実際に殺されたと推定し、また、これはドイツに帰ったラーベが支那での体験を人々の前で披露した時に用いた数値である」

チャンの『レイプ・オブ・南京』はデータラメだと言っているに等しい。追い詰められたチャンは、一九九九年一月十日付け同紙の投書欄で反論した。

①残酷な殺害方法について「残念ながら、それは起こった。」レ

可能性として考えられるのは、支那語の話せないラーベが、こういう特定の残虐行為を見ていなかったか、あるいは何かの理由で記録に残さなかったかだ。また、こうした犯罪は極秘のうちに言われた可能性もある。あるいはひょっとして、まったくなかった」

ウーダンは「ラーベは事件を目撃していない」と指摘しているのである。さらに、チャンの本に出ている次のようになくだりを問題にする。「生き埋め、去勢、臓器の抉り取り、人の焼き殺しが月並みになりだしただけでなく、例えば舌に鉄鉤をかけて吊るしたり、下半身を地中に埋めたりした人をシェパードが食い散らかすのを観賞するといった拷問がおこなわれた。その光景があまりにも身の毛のよだつものだったので、市内にいたナチ党員らさえ恐れおののき、その一人は虐殺を獣のような機械の作業と決め付けた」（九ページ）

そうチャンは書いたが、ウーダンは、こんな記述は、ラーベの日記に見当たらないことも指摘している。さらにウーダンは人数の問題も提起する。

**殺されたのは五、六万人か**

さらに、チャンの本に出ている次のようになくだりを問題にする。「生き埋め、去勢、臓器の抉り取り、人の焼き殺しが月並みになりだしただけでなく、例えば舌に鉄鉤をかけて吊るしたり、下半身を地中に埋めたりした人をシェパードが食い散ら

「いったい何人が日本人の手で殺されたかについては、いままも感情的な論争が続いている。支那人による、ある推計だと、その数は二十万〜三十万人にも達するが、これは最近、アイリス・チャンが『レイプ・オブ・南京』で広めた数値である。

ラーベは日記で、当初住んでいた百二十万人のうち約八十万人が南京

イブ・オブ・南京』の著者として、またジョン・ラーベの家族と日記の所在を突き止めた最初のアメリカ人として、一九三七年の集団殺戮から

万人の死体を焼却もしくは揚子江に棄てたと告白している」

実際に逃れてきた人々にインタビューし、日本兵が隣人の内臓を抉り出し、妊婦の腹の中から、胎児を取り出すのを目撃した人とも会った」

これだと、わざわざラーベの日記を持ち出す必要はない。聞き取り調査の結果と極東軍事裁判の記録、それに日本人の少佐の告白だけで、『レイプ・オブ・南京』を書くことができたはずだ。

②死者の数について

チャンは証拠としての「ラーベの日記」の価値を自ら否定した。

「血の海で死んだ人の正確な数字は永遠に分からないだろうが、五万人から六万人というラーベの推定は低すぎて正確さを欠く。もっと正確な数値は、ラーベが南京を去った後にできた支那語による埋葬記録に求められる。これに基づき、極東国際軍事裁判の判事は、少なくとも二十六万人が南京市内で殺されたと結論した。

ラーベを引っ張り出してきた本当の狙いは別のところにあった。それは「ドイツ人は善、日本人は悪」という虚構を作り出すことだ。

これは日本軍が棄てた死体を含んでいない。ある日本人の少佐は、十五

有名なナチの党員である。それでも、日本兵が「蛮行」にふけるのと対照的に、安全区の委員長として数十万

**謝るドイツ、謝らない日本**

謝るドイツ、謝らない日本

の支那人の命を救ったとして地元民から「生き仏」とあがめられた。

ドイツ人はヒトラーがしてかしたホロコーストに対して謝罪し、賠償金を支払ったが、日本人は戦後も謝罪や賠償支払いはせず、あまつさえ右翼が言論を封殺している、とチャンは絶叫する。

「さらに、(チャンが怒りを感じる点) ドイツ人がホロコーストの被害者に繰り返し謝罪したのに対し、日本人は東京に戦争犯罪人を祀っていること——ベルリンの真ん中にヒトラーの大聖堂を建てると政治的に同じことと戦時中に日本人から被害を受けたアメリカ人が呼んだ行為——にとどまらない」(十二頁)

これは靖国神社問題として、中共政府要人や反日日本人が繰り返し語ることになる台詞だ。

これとは別にドイツ国防軍の一部とドイツ産業界は、蒋介石政権に大きな商売をもちかけていた。軍需産業の育成を柱とする長期的な計画と、支那の沿岸を警備する高速魚雷艇の供給や港湾防衛用の砲台建設を緊急に進める短期計画からなる一大プロジェクトである。そしていったんは契約が結ばれた。

これに待ったをかけたのが、日本である。日本はドイツ、イタリアとの間で「日独伊防共協定」の交渉を進めていた。当時、ソ連が外国の共産主義者を煽動するために組織していたコミンテルンという組織があり、これに対抗してソ連に関する情報交換を協定の目的として、一九三六年十一月に締結を見る。

この外交交渉の最中に、日本側は問題のプロジェクトの存在を知り、

ラーベの日記のドイツ語版は題名が「ジョン・ラーベ／南京の善良なドイツ人」となっている。また、アメリカ版は「南京の善良な男」、英国版は「南京の善良なドイツ人」である。

### 怒る死の商人

しかし、ラーベは善人でも真実の語り手でもなかった。シーメンス社の社員として南京に駐在し、蒋介石政権を相手に商売をしていた。

シーメンス社は電機メーカーで発電所など電機関係の製品を売り込んでいたが、時には機関銃などの武器も販売する。死の商人の顔も持っていた。ラーベが登場してくるのは、商売との絡みにおいてである。

当時の蒋介石政権は、日本と戦う決意のもと、道路や鉄道の建設など

ドイツ側に抗議した。これを受けて独裁者の地位を固めたばかりのヒトラーは、いったん契約にまで進んだ援蒋プロジェクトについて破棄を命じた。一般の支那貿易にもブレーキがかかりそうだった。

怒ったのが、ドイツ経済界である。上海、南京に来ていたドイツ商人はいつせいに不満の声を上げた。ラーベもその一人だったはずだ。ここに至るまでの事情は、一九七八年に米ヴァッサー大学のシフエ・リャン教授が『支独関係』と題する著作ですらに詳細を明らかにしている。

軍事顧問団長のファルケンハウゼンも困った立場に追い込まれた。蒋介石に対し、対日戦争を起こすよう促してきたが、それはドイツ産業界が武器その他の必要物資を供給することが一つの前提である。それが崩

社会的インフラストラクチャーの整備を急いでおり、弾薬や軍服の製造工場なども計画していた。この需要を当て込んでドイツ企業が蒋介石政権に群がった。

ドイツ商人が政商として食い込んでいた背景には、ドイツ軍事顧問団の存在があった。支那事変当時も四十人内外のドイツ人将校がいた。その最高責任者が、アレクサンダー・フォン・ファルケンハウゼンである。一九三四年に蒋介石のもとにやってきて、たちまち籠絡されてしまい、対日戦争のシナリオを書いた。

ラーベらの取引案件は、ファルケンハウゼンの承認を受けることになっており、両者は持ちつ持たれつの関係にあった。ラーベはファルケンハウゼンと家族ぐるみの付き合いをしていた。

れた。

### 武士道をあざ笑う

このプロジェクトが実行されていたら、蒋介石政権は、一大軍勢力を備えることになり、その後の歴史コースは大きく変化して、世界は今日と異なった姿になっていた可能性がある。

またとないチャンスが奪われた蒋介石側も怒った。慎みを知らない妻の宋美齡は不快感をあらわにしたらしい。ラーベは一九三七年十月三日付の日記に、こう書いている。

「政府高官筋の人々、とりわけ蒋介石夫人の宋美齡はドイツにあまり好感をもっていないという噂だ。ドイツが日本と防共協定を結んでおり、ソビエトと同席したくないという理由から、ブリュッセル会議への出席

を拒否したからだ。(中略)『私たち  
の味方でない者はすなわち敵』と夫  
人は言ったという」(平野訳による)  
ドイツ人たちは蒋介石のご機嫌を  
とる必要に迫られた。

こうしてヒトラーに対する巻き返  
しが、蒋介石とドイツ軍事顧問団、  
ドイツ商人、それに当時、支那に居



蒋介石とフィッチが手を組んでいたとしたら……

チをつけるため、日本の「武士道」  
を貶めることによって、ヒトラーと、  
イタリアの独裁者、ムッソリーニを  
「叱責」しようと考えた。  
その証拠は、イタリア人、アムレ  
ト・ヴェスバが書いたという『日本の  
秘密工作員』と題する本である。こ  
れは旧満州国における日本軍の「蜜  
行」を主題にしている。原稿が出来  
上がったのは一九三七年の秋、つま  
り南京陥落の直前である。

この本には、プロパガンダの責任  
者、董顕光の部下であったH・J・  
ティンパーレが、一九三八年六月付  
けで序文を書いている。それによる  
と、上海にいたティンパーレはヴェ  
スバの原稿を「外国政府の役人」に  
見せた。つまり上司の董顕光である。  
「外国政府の役人」はティンパーレ  
に与えた返書で「これは西欧文明の

たフィッチらアメリカ人宣教師の積  
極的な助太刀を得て幕を開ける。

しかし、ドイツ人にとってこれは、  
独裁者に刃向かう行為であり命の危  
険が伴う。そこでヒトラーに対する  
直接的な批判を避けた。代わりに、  
ヒトラーがパートナーとして選んだ  
日本人を凶暴な野蛮人として描く架

空の話をでっち上げることにした。

というのは、三国協定締結交渉の  
過程で、東洋人に人種的偏見を持つ  
ヒトラーに対し、日本側が「武士道」  
を持ち出し、ヒトラーを感心させた  
経緯があるからだ。そこで南京に居  
たドイツ人は、ヒトラーに向かって  
「武士道」は嘘だと訴えることにした。  
むろん、アメリカ人も同調した。

ここで詳しくふれるゆとりはない  
が、フィッチが書き残した文書に、  
武士道をあざけるくだりがある。

この意図を端的に表現したのは、  
当時は蒋介石政権べったりのロイタ  
ー通信で記者をしていたイギリス人、  
フランク・オリバーが、一九三八年  
に北京で仕上げ、翌年ロンドンで出  
版した『戦線布告なき特別な戦争』  
である。

その第九章の主な内容は、フィッ  
チらの原稿を下敷きにした「南京事  
件」の描写だが、この章に「武士道  
さんまい」と表題をつけた。武士道  
の実践が虐殺だと皮肉ったわけだ。

## ムッソリーニを叱責

蒋介石政権のプロパガンダ機関の  
支援を受けたドイツ人とアメリカ人  
によるでっち上げ計画は、日独伊三  
国防共協定締結のすぐ後、つまり支  
那事変開始以前から始まっていたと  
見なければならぬ。この協定にケ

守護者を自任するヒトラーとムッソ  
リーニにとって苦い叱責だ。二人が  
この本を読めば、自分たちが間違っ  
て擁護しているものの正体について  
警告を受けるだろう」と書いた。ヒ  
トラーたちが「間違っただけで擁護して  
いるもの」とは日本に他ならない。

いわゆる南京論争では、ティンパ  
ーレが編集して一九三八年六月にロ  
ンドンで出版した『これが戦争だ』  
が先に有名になった。

議論は、この本の内容の真偽を巡  
って争われ、このため南京のドイツ  
人が果たした役割が見落とされてき  
た。また、この本が蒋介石政権のプ  
ロパガンダ組織がでっちあげた反日  
目的の本としては、二番目であるこ  
とも認識されていない。

トップバッターに予定されていた  
のはヴェスバの本だった。ただ、な

ぜか出版は遅れ、一九四一年にニュ  
ーヨーク州のガーデン・シティーで  
出たが、現在その存在を知る人は少  
ない。

横道にそれるが、ティンパーレは  
『これが戦争だ』の序文で「日本人民  
は、軍事・経済的支配層の犯罪に対  
して責任はなく、彼らは支那人と同  
様に、その被害者である」と書いて  
いる。これは今も中共が日本国内向  
けに使う台詞であり、反日日本人が  
繰り返す決まり文句である。

## 三十万人にこだわる理由

ラーベが南京に残留したのは、難  
民救済が目的ではなく、ヒトラー宛  
に、日本軍の「残虐行為」について  
の報告書を作成するためだった。

それが完成し、さらに宣教師のジ  
ョン・マギーが撮影したと称する



ティンパーレの上司、薫頭光

る記念館の壁には「300000」の数字が彫り込んであるが、「数週間で三十万」という数字が否定されること、「南京事件」はナチによるホロコーストより酷いという虚構が壊れてしまう。それを恐れたのだ。

世の中には「二万人でも三十万人でも虐殺に変わりはない」と主張する人があるが、無邪気な議論である。中共は、三十万人でないと都合が悪

「極東軍事裁判で、専門家は一九三七年末から一九三八年にかけ、南京で二十六万人以上の非戦闘員が日本兵の手にかかって死んだと推定し、なかには三十

たせている。  
「極東軍事裁判で、専門家は一九三七年末から一九三八年にかけ、南京で二十六万人以上の非戦闘員が日本兵の手にかかって死んだと推定し、なかには三十

万人以上とした専門家もあった」(四ページ)  
ずばり三十万人と書かなかったのは、記念館の数字との関係や在米の支那人団体が過去に行なってきた運動との関連を隠すためだろう。

最初は絵画で

エピソードの類を別にすると、チャンの『レイプ・オブ・南京』の骨子に目新しい要素はない。このことも案外知られていない。「レイプ・オブ・南京」といった表現も「ホロコースト」になぞらえることも、さらに「三十万人」も、チャンが初めて持ち出したものではない。

「虐殺現場」の映画フィルムのコピーを手に入れると、ラーベは安全区委員長の仕事を放り出し、雲を巻いて帰国してしまう。

漢口に逃げていたファルケンハウゼンも報告書を書き、日本軍は「帝政時代のロシア軍並み」で、統制欠如と残酷かつ犯罪的な性格を暴露する証拠を残した、と見てきたような嘘を並べ、さらに「ドイツ軍の二個か三個の師団があれば、短期間で日本軍を支那からたたき出すことができる」と豪語した。

これにラーベの報告書とマギー・フィルムのコピーを添えてトラウトマン経由で本国に送ったが効果はなく、日本との提携にケチをつける内容であったのに、お咎めはなかった。これに対し、ドイツに逃げ帰ったラーベは、ゲシュタポ(秘密警察)

の取調べを受けた。だが、ラーベもさるもので、取調べを予想して弁明書を準備していた。それが「日記」である。

日記は日本軍の「善行」を「証言」とともに、自らが忠実なナチ党員であったことを示す文言をちりばめてある。

「日記」にはナチの徽章であるカギ十字のついた腕章を見て、日本兵が逃げ出したといった記事が繰り返して登場するが、これは「日独伊防共協定」を肯定する立場の表明であり、自分が忠実な党員だと強調することでもある。

ホロコーストよりひどい

ラーベが国際的に中立の立場にいたというのは想像にすぎない。チャンは先の(二)で、ナチス党員には

事件をでっち上げる動機がないとしたが、ラーベには動機が大いにあった。

しかし、これらの事実は、ラーベの日記を利用しようとする中国共産党にとってはどうでもよかった。大切なのは世界の人々、なかでもアメリカ人の無知である。ラーベがドイツ軍事顧問団と組んだ「政商」として甘い汁を吸っていたことなどは想像外のことだろう。その無知に付け込んで、チャンが描いて見せたのが、ラーベの「善行」であり、「残虐性」をあらわにした日本人である。

これによって、ユダヤ人に詫びて金を支払ったドイツと、支那人に謝罪せず、金も払わない日本という虚構を打ち出した。

その際、チャンらがこだわったのが死者の数と期間である。南京にあ

## ●ヒトラーと南京大虐殺

プ・オブ・南京』は、これを踏襲したに過ぎない。

この本と中国共産党を結びつける直接の証拠は今のところない。しかし、「記念館」設立など当時の動きとその後続く在米華僑あるいは支那系米国人らの動きに照らして、中国共産党の関与がないと見るほうが不自然である。

三十万人という数字についても、次のような事実がある。チャンが「ラーベの日記」を発見したと嘘の報告記者会見を開いた一九九六年に、「日本侵華研究学会」と名乗る支那系アメリカ人中心の団体が、コネチカット州ニューヘヴンにあるイエール神学校図書館で「アメリカ人宣教師が目撃証言する」というテーマを掲げた展示会を開いた。一九九六年八月から翌年の一月までの長期間にわ

たる催しである。

この展示会の会場で売っていたのが『アメリカ人宣教師が目撃証言する』と題した冊子である。ここにはアメリカ人宣教師が残した文書のさわりが収められているが、アメリカ在住の支那人とおぼしいティンウエイ・ウと名乗る人物が序文で次のように書いた。

「南京虐殺が人類の歴史において最も身の毛のよだつ出来事の一つであることに疑問の余地はない。ある推定によれば、三カ月（一九三七年十月～三月）の間に日本の軍隊は南京市内で三十万人以上の無辜の支那人を殺し、八万人以上の女性を強姦した。数がおびただしいだけでなく、被害者が死に直面させられたときの態様（斬首、刺殺、生き埋め、焼き殺し、輪姦）があまりに

も強い嫌悪感を誘うので、アウシュビッツのガス室のほうが安楽だったように思えてくる」

この序文は同年六月の日付がついている。チャンの記者会見より半年も前である。

このようにチャンの『レイプ・オブ・南京』は、それまでの支那側の主張に「ラーベの日記」を結びつけただけのたわごとには過ぎない。

### 支那人も野蛮人

しかし、同書は将来へ向けての布石も打っている。やたら「強姦」が出てくるのは、今年日本人を怒らせた慰安婦問題への伏線だといえる。また、百六十四ページには捕虜の生体解剖の話も出てくるが、これは「七三一部隊」で播さぶりをかけるための布石である。

目当たる年である。

ニューヨーク・タイムズの同年十二月二十日の記事によると、在米支那人の団体である「対日索賠中華同胞会」と称する団体が、ニューヨーク市のブロードウェイの一角で、同月十三日から二十日まで美術展を開いた。

支那、台湾、香港、シンガポール出身の華僑芸術家六十四人による作品展で、展示された絵画は一九三七年に日本軍によって支那人が味わった死の苦しみを描いているという。この時点では、後に連中が持ち出してくる写真をまだ入手できていなかったわけである。

主催者はニューヨーク・タイムズの取材に対して、日本の教科書が支那に対する「侵略」を「進出」に書き換え、歴史に対する態度を変更したことが、この展覧会を開く動機と

なったと説明した。

これは一九八二年に起こった日本のマスコミによる誤報事件を指している。同年六月、高校の歴史教科書について「日本軍が華北を侵略すると……」が「日本軍が華北に進出すると……」に変わった、と報じた事件である。後に誤報であることが証明された。

しかし、これは口実にすぎない。一九八四年ごろから目だつて反日に転じた中共は、盧溝橋に「中国人民抗日戦争記念館」を建設することを決定し、（一九八七年七月開館）、翌八五年八月十五日、南京に「記念館」、ハルビンに「七三一細菌部隊罪証陳列館」を開館した。以後、反日プロパガンダの手を緩めたことはない。

### 八万人以上の女性を強姦

一九八七年には、これらの動きと

呼応する本もアメリカで出版されている。題して『もう一つのニュルンベルク——語られざる東京戦争犯罪裁判』。著者はアーノルド・C・ブラックマンと名乗る元UP通信の記者で、二十三歳の時、極東軍事裁判を取材したという。同裁判の内容を最初から終わりまでなぞった作品で、「南京事件」を巡るやり取りも収録されている。

この本が早くも「南京事件」を「レイプ・オブ・南京」と呼び変え、またホロコーストになぞらえている。ブラックマンは前書きで「レイプ・オブ・南京」で「六週間にわたって二十五万人以上の老若男女が殺された」とし、「一九四五年に支那大陸での戦争が終わるまでに、六百万人も市民が日本軍によって殺された——忘れられたホロコーストだ」（一七頁）と書いている。チャンの『レイ



中共はこれまで蒋介石をこき下ろし続けている。しかし、蔣の遺産はチャッカリ横取りした。これに対し、支那人のあくどい手口を知り尽くした人物がいた。「ラーベの日記」を編集したヴィツケルトである。

ヴィツケルトは、一九三七年当時、ドイツ大使館南京分室事務長を勤めていたシャウフェンベルクが残した記録をラーベの「日記」に挿入した。その中に次のくだりがある。

「ラーベ氏も同じことを感じ、南京から出るための許可を取ろうとしているが、最近またぶりかえした日本兵による血なまぐさい事件を阻止すべく、あいかわらず奔走している。」

(中略) 第一、暴行事件といっても、すべてを中国人から一方的に話を聞いているだけではないか(平野訳による)

これは「南京事件」は一方的伝聞にすぎないという同時代の証言であり、第一級の資料だ。これだけで、「ラーベの日記」の証拠力は否定されてしまふ。

さらに、別の個所にあるシャウフェンベルクの報告には、次のような感想が含まれている。

「部隊が統制を失ったからだ、と思うことはやさしい。だが私はそうは思わない。アジアの人間の戦争のやり方は、我々西洋人とは根本的に違っているからだ。もし、日本と中国の立場が逆だったとしても、おそらく大した違いはなかっただろう。とくに扇動する人間がいる場合には(平野訳による)

つまり支那人も野蛮人だという言明である。シャウフェンベルクは、「南京」の半年ほど前に支那人が日本

人民間人多数を虐殺した「通州事件」を念頭に置いていたのだろう。

これらのくだりは支那語版の「拉貝日記」からは省いてあるが、いわゆる「南京大虐殺」が欧米人にとって心地よい理由がこれによって判明する。欧米人はいまだ、東洋人＝野蛮人という見方を棄て切っていない。中国共産党は、こんな欧米人の心理まで計算に入れ、嘘で塗り固める作業を組織的に積み重ねてきているのだが、それがいずれ、ブーメランのように自らに跳ね返ってくることに気づいていない。

(文中敬称略)

ふるそうこういち  
一九四〇年、大阪市生まれ。兵庫県立大学卒業。新聞記者を経て、フリージャーナリスト。現在、支那事変を研究。

好評発売中 ワック出版

**韓国・北朝鮮を永久に黙らせる100問100答**  
黄文雄 歴史報道・拉致犯罪国家には、真実の盾を闘え！ ISBN978-4-89831-105-9 定価1000円

**中国を永久に黙らせる100問100答**  
渡部昇一 中国の言い掛かりには、知識と偏見を持つて対処せよ！ ISBN978-4-89831-104-2 定価1000円

**反日に勝つ 「昭和史の常識」**  
渡部昇一 もう中韓に煽るな！これが日本の言い分だ！ ISBN978-4-89831-088-6 定価1575円

**大東亜戦争の真実**  
東條由布子編 昭和史の第一級史料の封印を解く！ ISBN4-89831-083-4 定価1470円

**硫黄島 栗林忠道大将の教訓**  
小室直樹 歴史に学ばない日本人よ！ 硫黄島の死闘が変えた戦後 ISBN978-4-89831-102-8 定価1680円

**だから日本人よ、靖国へ行こう**  
小野田寛郎 二人の国士が縦横無尽に日本を語る！ 中條高德 ISBN4-89831-091-5 定価1395円

**日本国民に告ぐ**  
小室直樹 250年、自虐史観！ 250年、反日史観！ ISBN4-89831-085-0 定価1680円

**戦艦大和 最後の乗組員の遺言**  
八杉康夫 これが「男たちの大和」の真実だ！ ISBN4-89831-086-9 定価1575円

WAC ワック出版 東京千代田区九段南3-1-1 TEL.03-5226-7622 http://web-wac.co.jp/ \*ご希望の書籍がお近くの書店にない場合には、電話03-6739-0711までご注文ください。